平成 26 年度第８回文系チャレンジ講座を実施しました

平成 26 年度第８回文系チャレンジ講座が，平成 27 年２月４日、「「美術」のはじまり」をテーマに本学教育福祉科学部准教授の田中修二先生が高校生に授業を行いました。

遠隔配信された高校は、大分雄城台（おぎのだい）・大分鶴崎・安心院（あじむ）・日田・高田・臼杵の６校(80 名)と，来学した竹田高校(14 名)を合わせて、計 94 名の高校生が受講しました。

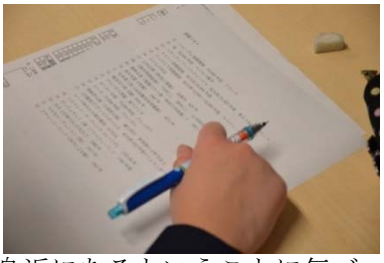
田中先生は、「物事には始まりがあり、「美術」も同じです。いつ「美術」が始まったのかということを考えると、見方によって様々な「始まり」が見えてきます。その「始まり」を具体的な「作品」を例に「美術」とは何か、なぜ「美術」があるのか、「美術」は人の役に立つのか等について考えてみましょう。「美術」に限らず、いろいろな物事について様々な見方をすることができるきっかけになるような授業にしたいと思います。」と、受講生に語りかけました。

田中先生は、「美術」の始まりとして３つの始まりを提示しました。第一は人類にとっての「美術」の始まりです。ショーヴェ洞窟壁画[1]を用いながら、先史時代から人間は「美術」をつくっていたのではないか、当時の人々が洞窟に壁画を描きたいと思った動機は何だったのかと問いかけます。狩猟がうまくできるようにという願いを込めて壁に描写したのではないか、おそらく宗教的で呪術的な意味合いが考えられる。」と説明がありました。

第二に、子どもが描いた絵は現在の子どもが描く絵も１６世紀前半にイタリアの子どもが描いた絵も類似しています。受講生に自分自身が子どもの頃に描いた絵を思い出してほしい、また、「美術」との遭遇はいつ頃どのようにして認識したのかと問いかけました。

第三に、どのようにして社会の中で「美術」が誕生するかについて説明しました。昔の職人が作る仏像や陶磁器などは、当時「美術」として認識されず、信仰の対象として日常生活の必需品として使用されたものでした。時代を経て「美術」と認識されるようになったのではないかという説明に受講生は大変興味を示し、「いつ誰によってどのような過程を経て「美術」が生まれるか」という研ぎ澄まされた一瞬に接することができました。

受講する中で、「美術」と「美術ではないもの」の間には明確な区分はないことが次第にわかってきました。ボッティチェリの絵画の評価は、100 年もの時を経て「名作」とみなされるようになったこと聞き、改めて「美術」を意識するようになりました。私たちの身の回りの全てが、「美術」としてとらえることができることに気づき、「美術」とはどんどん拡がっていくものだということも分かってきました。「モナリザ」やパリのエッフェル塔、イギリスの都市リーズに今も残る商店街の写真を紹介し、生活の中に多くの「美術」があると説明しました。受講前には遠い存在だった「美術」が、身近にあるということに気づかされ、「美術」を今後、創造していく役目も担っていることが理解できました。



講義後のアンケート調査では、「総合的に判断して良かった」(96%「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ)、「教員は真剣に取り組んでいた」(99%)、「授業内容はわかりやすかった」(92%)、「板書(スライド)は適切だった」(99%)，「受講生は授業に意欲的に取り組んだ」(97%)と高い評価結果がでました。遠隔配信については、「音声は良く聞こえた」(81%)、「映像はよく見えた」(100%)という結果がでました。受講生の具体的な声として、「今まで考えたこともなかったので興味深く受講した」「何もないところから作者がどれくらい思いを込め真剣に創作したかを想像すると、全てが美しく見える」「美術の奥深さに接する機会を得た」「美術には無限の知性と想像力が溢れていると感じた」「他校生のようすを見ながら受講して、自分の狭さを感じた」など、多くの感想が寄せられました。

---

[1] フランス南東部ローヌ・アルプ地方のアルデッシュ県、県都プリヴァ(Privas)の近郊の洞窟壁画。3 万 6 千年前の躍動する動物の姿を描写。世界最古の壁画として知られる。2014 年 6 月世界遺産に登録。